

2016年
6月8日
水曜日

井口 泰 教授（労働経済学）

「宗教改革500周年を迎える欧州と世界」

2015年に、内戦と空爆の続くシリアなどから、難民又は庇護希望者を合わせ120万人を超える人々が欧州諸国におしよせました。同年9月、ハンガリーが難民受入れを拒否し国境で人々が滞留するなか、メルケル首相はドイツが難民を受け入れることを明言しました。同時に、年間3千人以上が、悪天候の地中海で命を落とす悲劇も起きていたのです。

あの時、メルケル首相は、これは、「私たちが、幼少の時から学んできたことなのです」と語りました。これとは、マタイによる福音書25章31節から40節をさしています。皆さん、その聖書の箇所をどうか読んでください。これは、最後の審判の情景を語ったイエスのことばです。

「王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎ

なさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』そこで、王は答える。『はつきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

メルケル首相の決断を知らなかった州や市町村は、難民の大量流入で一時的にせよパニック状態に陥りま

した。しかしドイツ各地で、数十万人のボランティアが、難民や庇護希望者の生きる日々を支えました。同時に、フランスで2015年1月にシヤリーエブド事件、11月にパリ同時テロ事件がおき、難民受入れがテロや治安悪化をもたらすという懸念が、ドイツでも急速に広がりました。2016年3月、EUとトルコは協定を締結し、巨額の財政支援をトルコに与え、EUに不法入国した人々をトルコに強制送還する一方、同数の第三国定住難民をトルコから受け入れることにしました。

難民とテロとは、本来別の問題です。難民という集団を敵にして攻撃する発想にはあまりにも危険です。そうしたなかでは、社会の寛容や人権に対する強い思いは後退していくでしょう。

こうしたなか、ドイツ連邦議会は、1517年のマルチン・ルターによる宗教改革500周年を祝うべ

きか否かについて1年半も議論しました。宗教改革後の「30年戦争」よって、当時は複数の国家に分かれていたドイツの地域が疲弊する悲惨な結果を招いたことも事実でした。しかし、宗教改革が欧州だけでなく、世界的意味をもった大きな社会運動であり、人々が問を発して自ら考え、不寛容を克服することに重要な意義があるからこそ、世界に積極的に発信することにしたのです。

私は、単に歴史的意義を強調する理由から、皆さんに宗教改革のことを考えてほしいのではありません。ルター自身が殺害や迫害の恐怖のなかで、いわば社会のアウトサイダーとなりながらも、新しい時代を切り開く挑戦者になった勇気を皆さんに感じてほしいのです。同時に、世界で増加する難民の運命を理解する共感を育てることで、新たな時代を開いていきたいと思えます。